

民俗博物館だより

Vol. X X No. 2

1994. 1. 31



▲ 池のニゴシ・雑魚とり (辻本忠夫画)

目次

収藏品展「くらし絵と描かれた用具」について 1

奈良県立民俗博物館と民俗公園を見て 3

— 植物学の視点から —

お知らせ 7

「くらし絵と描かれた用具」について

奥野義雄

平成6年1月5日 ▶ 8月28日

奈良県の安堵町に生まれ、若くして県内の歴史・考古・民俗にかかわる文化財や郷土の歴史に心ひかれた故辻本忠夫氏は、青年期から、これらの文化財の収集や郷土史の調査・研究をおこなってこられた。また、同氏は、そのかたわら目についた風物や生活の情景を写生してきた。多くの写生画の中に描かれた生活の情景の絵には、今日では見ることのできない「くらし」が描かれている。たとえば、佐保川周辺の風景画の場合には、景観そのものが変貌してしまって、今日みることができない道標が描かれている。また、子供の遊びの情景の中でもよく見られたベッタン（メンコともいう）の遊びやオテダマ（テンチャン、オジャミともいう一補註）やさらに、村内を流れる小川で洗濯タライとイタ（板）で衣類を洗濯する姿は、現代社会では全く見られなくなった光景である。

今回の収蔵品展では、このような「くらし」の情景・光景を描いた写生画を、便宜上「くらし絵」と呼称して、これらの「くらし絵」に描かれている遊びや娯楽の用具や生活の用

具（灯火や暖房の用具、川漁の用具、洗濯や裁縫の用具）などを併せて紹介することを目標とした。陶芸作家・故富本憲吉氏の助言と励ましを得て数十年来辻本氏が描き続けてきた「くらし絵」から、大正時代から昭和時代に至る生活の情景を垣間見ることによって、往時のくらしぶりを理解してもらうことになる。

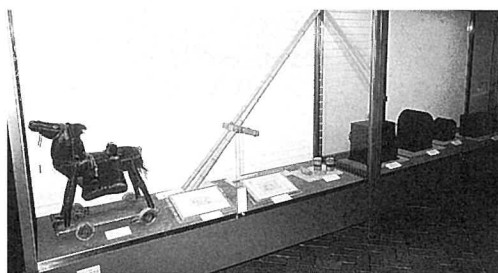
今回の収蔵品展の展示構成と主な出品資料についての概略を掲げると次のとおりである（展示資料点数267点）。

①さまざまなくらし絵

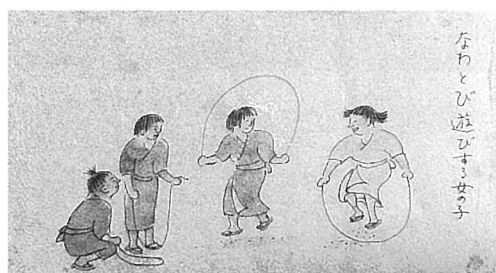
◎辻本氏が描きつづけたさまざまな写生画を展示するとともに、同氏愛用の写生用具もあわせて紹介して導入部とする。

○主な出品資料には、辻本忠夫氏愛用の写生用具がある（10点）。

○主なくらし絵には、野辺送り、六斎念仏、洗濯情景、佐保川の道標光景、および額安寺の風景画などがある（17点）。



▲ 展示風景



▲「なわとび遊びする女の子」の写生画



▲「ばいがち合ひ」の写生画



▲「テンチャン遊び」の写生画

②くらし絵に描かれた遊びと娯楽の用具

◎くらし絵の中には、描かれている竹馬、パイゴマ勝負、テンチャン遊び、蓄音機（蓄音器）を聞く人びとなどがあり、これらの「くらし絵」と遊びと娯楽用具を紹介する。

○主な出品資料には、竹馬、コマ、パイゴマ（ベイゴマ）、オジャミ（オテダマ、テンチャン）、タコ、ラジオ、蓄音機、レコード盤などの遊びと娯楽の用具がある（155点）。

○主なくらし絵には、パイゴマの勝負、竹馬（雪足）、テンチャン（オジャミ）をする女の子、木馬づくり、蓄音機などがある（7点）。

③くらし絵に描かれた生活用品

◎くらし絵に描かれている写生画には、川魚取り、洗濯、照明具、暖房具などがあり、これらに関する用具を紹介する。

○主な出品資料には、各種のモンドリ、投網、水中メガネ、洗濯イタ・タライ、キヌタ、ガントウ、アンドン、ランプ、コタツなどがある（70点）。

○主なくらし絵には、ランプのホヤ磨き、行灯のそばでのじゅばんづくり、小魚とり、小川での洗濯などがある

（8点）。

以上が、今回の収蔵品展の概要であり、すでに述べたようにこれらの「くらし絵」とそこに描かれている生活の用具から往時（大正時代から昭和時代に至る時期）のくらしを垣間見てもらえればと思っている。

今回の収蔵品展は平成6年1月5日から8月28日まで開催している。

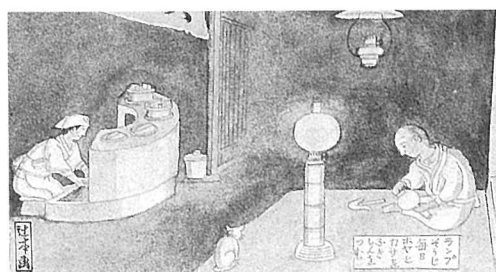
※補註 子供の遊びで地域によって名称が異なるものが少なくない。たとえば、オテダマ（お手玉）と一般に呼ばれている女の子の遊びは、本文でも触れたとおり、オジャミ、テンチャンとも呼ばれる。これらの呼称以外にもイシナゴと呼ぶ地域（奈良市水間、都祁村吐山など）やオイシコという地域（吉野町小名）がある。また、男の子の遊びの一つにパイゴマと呼ぶコマは、ベイゴマ勝負とか、パイマワシとか称するところがある（奈良市域など）。オテダマやパイゴマなどの遊びの呼称には、地域によって異なる名称があり、これら以外の遊びにも同じことがいえるようである（ビー玉、竹馬など）。



▲「風あげ」の写生画



▲「蓄音器」の写生画



▲「ランプ磨き」の写生画



▲「澁紙張り」の写生画

奈良県立民俗博物館と大和民俗公園を見て

— 植物学の視点から —

北川 尚 史

■はじめに

近年、科学技術の著しい発達とともに人々の生活形態が急速に変化した。年中行事や日常生活にかかわる古い習俗が忘れられようとしている。先祖が開発し改良してきた、生産や衣食住に用いられるさまざまな道具や調度品が廃棄されている。古くから継承されてきた技術が失われ、数十年前まで日常的に使っていた道具でさえも、その使い方を知らない世代が増えている。日本民族が長い歴史の中で培ってきた生活の知恵がいまや途絶えようとしているのである。

奈良県立民俗博物館は大和郡山市に建設され、昭和49年11月に開館した。古い歴史をもつ大和の地に県立の民俗博物館が建設されたことは、まことに時宜を得た快挙であり、意義深いものであった。この民俗博物館は、日常生活からすでに消え失せてしまった、または消え失せようとしている多数の民俗資料を収集・保存し、その一部を展示している。また、民俗に関する教育・研究も活発に行っている。

県立民俗博物館の本館を中心に、周辺の約26.6ヘクタールの地が大和民俗公園であり、都市公園として位置づけられている。ここは、現在、9棟の代表的な古い民家が奈良県の各地から移築されており、博物館の野外展示場として機能している。

大和民俗公園の大部分の面積を占めているのは丘陵部に発達した里山林（二次林）である。里山林は古くから人手が加わることによって維持されてきた林で、農村や山村の生活と切り離すことのできないものであり、民俗博物館と一体となって機能すべき貴重な自然環境をそなえている。私は植物学の立場から、この里山林が民俗博物館にとってどのような意義があるかについて以下に考えてみたい。

■里山林とその利用

大和民俗公園の丘陵部にはコナラ、クヌギ

などの落葉樹を主体とした雑木林とアカマツの松林がある。このタイプの林は西日本の低山地に普通に見られるものであり、人為によって維持され、したがって人里の近くに発達するため里山林と呼ばれる。里山林は古くから農山村の人々の生活と深いかわりをもってきたのであり、現在でも田舎へ行くと、多くの場合、集落の近くの山に見ることができる。人々はかつて里山林から燃料や肥料やさまざまな生活用具の材料を得た。里山林から得た鳥獣や魚、山菜やキノコなどの野生の動植物は農山村の食生活を豊かにした。

農山村の人々にとってコナラやクヌギは生活に不可欠な資源であった。その幹や枝は薪炭として、また大量の落ち葉は堆肥として利用された。これらの樹木は伐採すると、切り株から萌芽する性質がある。すなわち、切り株から新しい枝（ひこばえ）が出て、それがまた大きく成長する。地上部を伐つても、地下の根は生き残るので、切り株から芽生えたひこばえの成長が速い。したがって、適当な間隔（ふつうは20～30周年）で伐採すれば同じタイプの林をいつまでも維持することができる。

現在、環境問題にかかわって話題になっている「自然の持続可能（サステナブル）な利用」を昔の人たちは経験的に会得し、身近な自然を上手に利用してきたのである。里山全体を一つの生態系としてとらえた場合、毎年、森林の年間生産量に見合った量だけを利用す



▲ 大和民俗公園の町屋集落遠望

ることによって、つまり、生態系のバイオマス（生物量）の減少をきたさない範囲で利用することによって、里山林は日常生活に必要な資源の安定した供給源であり続けたのである。里人たちは身近な自然を収奪の対象と見なさず、増えた分だけを利用して、元の状態に戻っていたのである。かつての里山林の利用は、元金に手をつけずに利子だけで生計を営むようなものであり、「持続可能」を図った理想的な形態であった。

里に近い場所の松林も人手が加わることによって健全に維持されていた。マツの本来の自生地は海岸の崖（クロマツ）や山の尾根の急斜面（アカマツ）であり、雨で洗い流されて林床に腐植質が堆積しない、痩せた土地である。マツはまた明るいところに生える樹木（陽樹）であり、暗い鬱閉した場所を好まない。実際、マツの本来の自生地では、他の樹木はあまり生えず、明るい粗林をなしている。

松林でも、昔は、燃料として利用するために、林床に落ちた松葉を熊手で掻き集め、松ぼっくりを拾い、低木や下草を刈り取った。大きく成長して、混み合ってきたマツは間伐して、建築などの用材や薪として利用した。そのために松林は土壌が痩せ、風通しのよい明るい状態に保たれてきた。当時の人々には自覚がなかったであろうが、そのような日常的な営為がマツの本来の自生地の環境を維持してきたのであり、その結果、マツは里山林の重要な構成要素となったのである。

人為的な外圧をさらに強化し、里山林の伐採後、刈り取りや火入れを行うことによって、森林の回復が阻害され、代わりに草地が形成される。その代表的なものがカヤ（ススキ）の草地である。昔は集落の近くに茅場があり、そこで収穫されたススキは茅葺き屋根の材料として欠かせないものであった。炭俵の材料として使われるススキもこの茅場から採取された。昔は農耕用に牛馬が使われていたが、人里の近くの草地はその飼料の供給源でもあった。

雑木林は主として落葉広葉樹からなる林であるため、林内の環境の季節的な変化が大きい。落葉樹林では、樹木の葉が落ちている季節には、林床に光が射しこむため、種々の草

が生える。とくに、春の短い季節に、成長し、花を咲かせ、結実する、いわゆる春の短命植物（スプリング・エフェメラル）も多い。春には草ばかりでなく、ヤマザクラやツツジやフジなどの樹木も美しい花を咲かせる。それらの多くの草や樹木の花の蜜を求めて、チョウやハチたちが集まってくる。クヌギにはカブトムシやクワガタムシなどのさまざまな昆虫が樹液を求めてやってくる。秋には木々は紅葉（黄葉）し、ガマズミやムラサキシキブなどの美しい実がなる。昆虫や木の実を求めて多くの鳥たちがやってくる。コナラやクヌギのどんぐり（堅果）はネズミやリスの餌になり、それを狙うキツネやフクロウなどの肉食性の動物が生息する。

里山林には多くのキノコが発生する。雑木林にはシイタケ、シメジ、エノキタケなど、松林にはアマタケ、ハツタケ、マツタケなどの美味しいキノコが発生する（私の研究室の学生が卒業研究として大和民俗公園内のキノコを調べているが、それによれば名前が分かったものだけでも150種を越えている）。

このように動植物が豊富で四季の明瞭な里山林は、村人たちの生活の糧を得る場所であるとともに、日本人の感性をはぐくみ、数多くの民話を生んだ。里山林は「兎追いしかの山、小鮒釣りしかの川」の舞台であった。昔の人たちが慣れ親しんでいた里山林の情景は、自然から遠ざかってしまった現代の日本人にも、懐かしい心象風景として継承されているのである。

■里山林の衰退

各地の里山林は現在、衰退し危機的な状況にある。この状況は近年のわが国の高度経済成長との関わりが深く、その衰退の原因には大きく分けて二つある。その一つは開発による破壊である。近年の都市の膨張はすさまじく、かつての郊外の雑木林や松林が伐採され、その跡地は造成されて住宅地に変貌した。交通の便がよくなり、都会から遠く離れたところでも、ニュータウンやリゾート施設が建設されているが、それらは、多くの場合、里山林を破壊して造られたものであり、そこへ到る道路の建設もまた同様である。ゴルフ場の

建設も里山林に大きな打撃を与え、その衰退の大きな原因の一つになっている。そして、里山が都会の排出する大量のゴミの投棄場所になっていることも多い。

里山林の衰退のもう一つの原因は、逆に林を放置したことにある。山から人が去ったために変化が起きているのである。森林は自発的に変化するという性質をもっている。個々の植物はもちろん動かないが、長い目で見ると、植物社会はダイナミックに動いているのであり、その構成要素の組合せ（植物群落）は次第に変化する。植物自身が環境を変化させ、新しい環境に適応した植物がとって代わるからである。そのような植物群落の移りゆきを生態学では遷移（サクセッション）と呼んでいる。

雑木林を長期間放置すると、落ち葉などの有機物が溜まって土壌が次第に肥沃となり、また木が繁って林内が暗くなるため、次第に陽樹が減って陰樹が増えてゆく。奈良県の低地の場合、遷移が進むと、最終的に常緑性のカシやシイの優占する照葉樹林になるのが一般的である。奈良県の低山地のたいていの場所は、何百年もの間、いっさいの人手を加えず放置すれば、春日山や与喜山の原生林のような林になるのである。

近年、燃料を石油や天然ガスや電力に頼るようになり、農山村でも薪や炭はほとんど使われなくなった。堆肥や金肥などの有機肥料は、取扱いの楽な化学肥料にとって代わった。燃料や肥料の供給源としての里山林はその存在意義を失い、ほとんど顧みられなくなったのである。

コナラやクスギの幹や枝は現在もシイタケ栽培のほだぎ（櫓木）として利用されているが、かつての薪炭の利用に比べれば人為による外圧ははるかに規模が小さく、各地の雑木林は遷移が進んで衰退に向かっている。

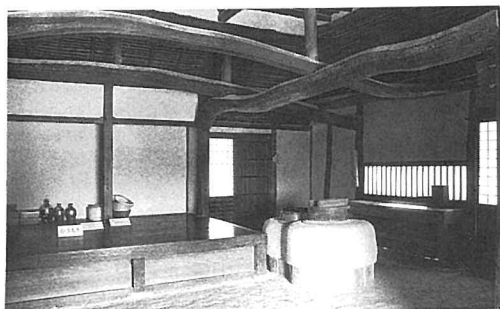
最近ではマツもほとんど利用されなくなった。松林で落ち葉を掻き集めることもなく、柴刈りをすることもなくなった。最近の松枯れの直接の原因はマツクイムシが運んでくるマツノザイセンチュウであるという（実際はこの線虫が運ぶ微生物であるという説も最近出ている）。しかし、松枯れ現象の根本には、長

年の間、人手が加わらないため、土壌が肥沃化し、低木が繁茂し、林間にマツ以外の高木が生い茂って、林の環境がマツの生育にとって不適當になったという事実がある。生育環境が悪化したために弱ったマツに、マツノザイセンチュウがとどめをさすという形で最近の松枯れは起きているようである。

先に述べた芽場などの草地もまた遷移系列の一段階をなしており、放置すれば、やがて落葉広葉樹林に、そして最終的には常緑広葉樹林に移り変わってゆく。したがって、ここでも、刈り取りや火入れといった人為を継続することによって遷移の進行を阻止できたのである。しかし、茅葺きの屋根が腐れてスキの需要が失われた。農耕用の牛馬を飼う必要もなくなり、その餌場の草地は放棄された。そのため、かつて人里の周辺部に発達していた草地の多くは遷移が進行してすでに林に変わってしまった。

里山林の衰退により、そこに生育する多くの植物の生存が危うくなっている。それに従って、当然、多くの動物の生存も危うくなっている。現在、日本では多くの動植物の種が絶滅の危機に瀕している。1989年に出た、日本産植物に関するレッドデータブック（『我が国における保護上重要な植物種の現状』）によれば、日本産の維管束植物（シダ植物と種子植物）の野生種は約5300種であるが、そのうちの実に895種（全体の約17%）が絶滅ないし絶滅の危険があるという。これは日本全土の植物を対象にしたデータであるが、その895種の中に里山林の植物も多く含まれている。

大和民俗公園の林は先に述べたように雑木林と松林の里山林であるが、ここでも、最近



▲ 大和民俗公園の復原民家内（旧松井家住宅）

はあまり人手を加えていないようであり、その林は衰退している。とくに松林の衰退が著しく、近年、たくさんのアカマツが枯れた

（現在、林内にはアカマツの新しい切り株がたくさんある）。かつては、この丘陵を覆っていたアカマツはすでに残り少なくなった。畝傍山などの大和三山もかつてアカマツの林で覆われていたが、現在、ほとんど枯れてしまい、往年の面影はない。大和民俗公園の松林も同じ道を歩んでいるのである。

大和民俗公園の雑木林もまた衰退し、林床には腐植質が溜まり、低木が生い茂っている。まだ、かなり小さいが常緑広葉樹のアラカシがすでに林内のあちこちに生えてきている。この雑木林には現在、コナラやクヌギとともに、アラカシ、ソヨゴ、ネジキ、タカノツメ、モチツツジなどが生えている。このタイプの林は奈良県の各地で見られ、アラカシ・ソヨゴ群落への移行段階にあると見なされている。大和民俗公園の雑木林は遠からずアラカシ・ソヨゴ群落がとって代わると予想される。現在、まだあまり目立たないアラカシはこの林で次代の制覇を狙っているのである。しかし、アラカシ・ソヨゴ群落もまたいずれは衰退し、最終的にはシイ（コジイ）の群落になると考えられる。

このように、大和民俗公園では、長年、放置してきたために、かつてのマツや雑木の里山林から常緑広葉樹林への遷移が確実に進んでいる。人為による「歯止め」を失ったために、植物社会は自然の法則に従って変化しているのである。

■ 博物館は周辺の自然を利用しよう

県立民俗博物館の1階の展示室には、農業



▲ 宇陀東山集落の遠望

や林業関係の道具や生活用具や古い習俗にかかわるさまざまな資料が展示されている。地下の収蔵庫には収集されたたくさんの民俗資料が保存されている。野外には茅葺きの家屋が点在しており、その中には、建物ばかりでなく、屋内も往時の姿をとどめているものがある。土間には竈（かまど）が設えられており、廐（うまや）にはかいば桶まで置いてある。その展示は古い家屋を内部まで含めて忠実に再現することを図っているようである。

大和民俗公園では、茅葺きの家屋ばかりでなく、その周辺の自然もなるべく当時の状態に保つべきであろう。私たちの先祖の生活は周辺の自然をさまざまに利用することによって成り立っていたのであり、昔の人たちの生活を真に理解するためには、その人たちが利用していた自然をよく知る必要がある。かつての民俗は当時の自然と一体化して考えるべきであるが、さいわい、大和民俗公園では、かつて茅葺きの家に住んでいた人たちが利用していた自然が、かなり衰退したとはいえ、まだ残っている。現在の県立民俗博物館は、収集した豊富な民俗資料とともに、その資料が使われていた時代の自然を身近に備えているのである。

愛知県犬山市の明治村は、明治時代の多くの建物や鉄道記念物などを移設・展示しており、いかにもノスタルジーを誘うすばらしい施設である。ここに集められている建物は学校、庁舎、教会など、明治時代の優れた近代建築であり、貴重な文化遺産の保存にとって明治村の存在意義は大きい。周辺は民俗博物館の場合と同様に松林や雑木林に囲まれているが、その自然環境は明治村の建物とは直接の関係がない。それらの林はもちろん景観としての役割は大きく、明治村を緑豊かな美しいものにしているが、「村」の生活との結びつきは少ない（建物の大部分は当時の都市のものである）。

明治村の場合と異なり、県立民俗博物館の周辺に里山林が存在することは、上述のように、博物館にとって大きな意味がある。博物館は、かつての農山村の自然環境の生きた見本としてこの林を利用できる。民俗学関係の体験学習の場としてこの林を利用することが

できる。この里山林は、民俗学のエコミュージアムとして機能する条件を具えているのであり、民俗博物館はそれを有効に活用すべきであろう。

里山林は遷移系例の途中にあるので、それを維持するためには人為の外圧を加え続けなければならない。かつての農山村では、資源を利用する目的のために絶え間なく人手を加えることが結果的に遷移を止めることとなり、いつまでも里山林を維持することができた。しかし、現在、里山林を保存しようとすれば、遷移を止めて現状を維持するために多大の人手を加えなければならない。かつての目的は意味を失い、かつての結果を目的としなければならないという困難な状況にあるのである。

ヨーロッパでは破壊された身近な自然を復元しようという運動が最近、盛んに行われている。日本でも身近な自然環境としての里山の価値が見直され、その保存・再現の運動が広がっている。このような状況の下で、民俗博物館は上記の困難を克服して、博物館にとってたいへん重要な周辺の里山林の維持のために努力してほしい。日本で唯一の県立博物館として、恵まれた立地条件を最大限に活用する方途を考えてほしいと願っている。

大和民俗公園の丘陵には、今後、いつまでもコナラやクスギやアカマツが生えてほしい。春にはツツジやスミレの花が咲いてほしい。さまざまなチョウやカミキリムシやトンボがいてほしい。面積から判断してキツネ

やシカは無理にしても、リスやノウサギぐらゐは生息してほしい。昆虫や木の実を求めて多くの種類の野鳥が集まってほしい。

博物館本館の近くに、里山林に接した池があり、そのほとりにハナショウブなどが植えられている。この池には、かつての田舎の池のように、メダカが泳いでいてほしい。ゲンゴロウやミズスマシが生息してほしい。池の周囲にはカエルやヘビがいてほしい。

博物館に訪れる人たちの価値観はもちろん一様ではない。野生の植物には無関心で、植栽された植物を好む人も多いであろう。したがって、建物の周りにサクラやカエデを植えることは止むを得ないであろう。花壇にバラやチューリップを植えることもよいであろう。しかし、里山林の中にはソメイヨシノやアカシアなどの造園木を植えるべきではない。林内に舗装道路などを造るべきではない。この里山林では、私たちの先祖がなじんできた自然環境をできるだけ忠実に再現すべきである。

(奈良教育大学教授)



▲ オオイヌのフグリ (大和民俗公園内)

● 民俗博物館展示ご案内

〔収蔵品展〕 暮らし絵と描かれた用具

〔期 間〕 平成6年1月5日から8月28日

〔常設展〕

大和の生業

(1) 大和の農村の暮らし (2) 大和の山村の暮らし
・ 稲作 ・ 大和のお茶 ・ 山の仕事

博物館ご利用のてびき

開館時間 館内 午前9時～午後5時

(ただし入館は4時30分まで)

民家 午前9時～午後4時

(博物館および民家の見学所要時間は)
約1時間30分

休館日 毎週月曜日

(その日が休日のときは翌日)

年末年始 (12月28日～1月4日)

観覧料

※入園および民家見学は無料

	大 人	高・大学生	小・中学生
個 人	200	150	70
団体 (20名以上)	150	100	50

* 交通案内図 *

